

「筑紫歌壇賞」贈賞式 小林賢太

現在、日本には多くの短歌賞があり、その対象は歌一首、三百首のまとめ、一冊の歌集など様々である。そんな中、ユニークな条件で異彩を放つ賞に「筑紫歌壇賞」がある。この賞の対象は、六十歳以上の歌人による第一歌集である。ジュニア向けなど若年層が対象の賞は多いが、ある年齢より上、かつ第一歌集という条件は個性的だ。主催は福岡県の公益財団法人 限科学技術・文化振興会、後援は太宰府市と太宰府市教育委員会。万葉の昔、福岡には大宰帥・大伴旅人や筑前守・山上憶良などの優れた歌人たちが集い、梅花の宴に代表されるように和歌文化が花開いた。その頃、旅人、憶良はともに六十歳代であった。彼らの歌人集団は後に筑紫歌壇と呼ばれる。筑紫歌壇賞の賞名、対象歌人の年齢は、右のごとき文学的事情を踏まえたものである。

短歌に限ったことではないが文化資本はどうしても首都に集中する。また文学賞、特に新人賞は若手の斬新な作品が耳目を集めやすい。そうした中で、地方が主体となり、六十歳を過ぎて初めてまとめられた歌集が注目されるのは非常に意義深い。

今年の受賞歌集は武藤義哉『春の幾何学』昨年は奥山かほる『安息角』、嬉しいことに一年連続で心の花の歌人が選ばれた。選考委員の評などは、共催の本阿弥書店発行『歌壇』八月号に掲載されている。今年の贈賞式は九月十八日に太宰府市で行われた。今

回は当日参加も可能で私も参加できたため、様子を簡単に紹介したい。当日は贈賞式とともに一般応募の題詠歌の表彰、シンポジウム（パネラーは伊藤一彦・小島ゆかり・桜川冴子・山下翔の四氏）もあり、充実した内容であつた。

昨年の式は台風で急遽中止となつたため、今年は武藤・奥山両氏揃つて壇上で贈賞された。佐佐木頼綱氏、奥田亡羊氏も応援に駆けつけ、会場の太宰府館まほろばホールは心の花の歌人で賑わつた。とはいえ、運営委員や選考委員は超結社で構成されており、会場には、かりん、コスマス、未来、八雁、やまなみ等、様々な結社、あるいは無所属の歌人が集まつた。第一部の贈賞式から第二部のシンポジウムまで、壇上からのお話はとても興味深く、紙幅の関係上ごく一部しか伝えられないのがもどかしい。

「筑紫歌壇賞二十年をふりかえる」がテーマのシンポジウムでは、これまでの受賞歌集の中に見られる余裕のあるユーモアが話題となつた。また歌集の中の歌が多様で、ワントーンではないという指摘もあつた。パネラー諸氏が詠作時に意識していることも話題に上つたが、小島氏の「なるべく言葉をねじ曲げずに、負荷を掛けずに、でも遠くに行きたい」という趣旨のお話も興味深かつた。短歌や言葉について、新たな気づきの多い一日となつた。最後に、受賞歌集から好きな歌を一首ずつ紹介したい。

岬へは言葉を持つてゆかぬこと風が言葉をくれるのだから

（武藤義哉『春の幾何学』）

・象の鼻ちやうど地表を擦る長さ世界は土の匂ひだらうか

（奥山かほる『安息角』）